殺し屋は人を殺さない

真中成実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
殺し屋は人を殺さない

【Ｎコード】
Ｎ１６８０ＢＡ

【作者名】
真中成実

【あらすじ】
海外留学中に失踪した”イサオ”は元殺し屋として”おれ”の前に現れた。
再開を喜ぶ暇もなく、いきなり銃を突きつけられた”おれ”は渋々”イサオ”との共同生活を始める。
”イサオ”の表の顔はデイトレーダー。裏の顔は、マヌケでクズな殺し屋どものしりぬぐいをする、プロフェッショナルのためのプロフェッショナルだ。

うなれ！愛銃アラスカン！汚い悪党どもと、不条理な世の中をぶっ潰せ！

人を殺さない殺し屋による異色ハードボイルド譚。

第一章　殺し屋入門（前書き）

この小説はフィクションです。

この作品は殺人を肯定するものではありません。むしろ作者は否定的な立場にいます。殺人を行えば当然刑法に触れます。あくまでエンターテイメントとしてお楽しみください。

１５歳未満の方の閲覧はご遠慮願います。

第一章は前フリになりますので、能書きをたれるな！という方は次章からお読みください。

第一章　殺し屋入門

殺し屋はハイリスク、ローリターンな職業である。

まず殺し屋が対象となる相手を殺すことによって、依頼主に金銭的な利益がもたらされる場合を考えてみよう。ブラジルで実際にあった事例だ。

ある会社の社長が病死し、すべての財産が息子に相続された。それに不満を抱いた社長の弟が、殺し屋に社長の息子の殺害を依頼した。

その翌朝、太陽が昇る少し前、サンパウロの裏路地に真っ赤な血だまりができた。

三日後、社長の弟は殺し屋に報酬を渡す。報酬は相続した遺産の約十分の一、現地でビルが三つ建つような額だ。

それからひと月して、社長の弟は死体となって発見された。

発見された場所が、弟の住んでいるマンションの真下だったことから、この事件は、見せかけの平和を享受する庶民の間では、単なる転落死として片づけられている。

しかしながら、裏の世界では、殺し屋が弟を殺したのだという意見で一致していた。そして彼らは口々にこう言った。「当然さ。あまりにも報酬が少なすぎる」

読者諸兄は、この殺し屋があまりにも欲張りすぎていると思うか

もしれない。本当にそうだろうか？よく考えてみてほしい。これから彼は警察に追われ、捕まればよくて監獄行き、最悪なら電気椅子だ。それに比べて社長の弟は金を払っただけ、直接手を下したわけではないから、警察に捕まる可能性は低い。この先ずっと安心して暮らしていける。

このように原則的に殺し屋と依頼主との間はイーブンな関係ではない。依頼人の方が立場上強いのだ。殺し屋は依頼主に搾取され、残った絞りかすだけが自分のものになる。だからこそ、殺し屋は毅然とした態度を崩すべきではない。ときには腐った依頼主を見せしめにする必要がある。

殺しの依頼が怨恨によるものだったとしても、そう大差はない。殺しを職業にするのはうまみが少ないのだ。確かに依頼主は標的となる相手を殺すことによって、殺し屋にそれ相応の報酬を与えるだろう。それこそ身を削ってでも。それでも危険度を考えれば、他の職業で地道に金を稼いだ方が絶対によいのである。

こちらも例を挙げよう。今度は日本の例だ。皆川ヒ素殺しと聞けば、ご記憶の方もあるかもしれない。大まかなあらましはこうである。

あるゼネコンの社長がインサイダー取引によって莫大な利益を得た。

ところが当時の経理を担当していた人物が、不透明な株の譲渡が行われた形跡を発見した。自社株がわずか一日で、ある人物を経由し、大量に売りさばかれていたのである。時価にして数億。個人が一日で動かす金としては大きすぎた。

彼は警察に密告した。その三週間後、ゼネコンの事務所前には警官の足跡が大量につけられた。子豚のように丸々太った社長はあっというまに留置所送りになった。

復讐に燃えた社長は人を使って密告者を殺すことを考えた。

現在のインターネットの闇は驚くほど深い。あるキーワードをちょんちょんと打つだけで、トップに裏の仕事の募集が現れるのだ。ドラッグ、窃盗、売春、恐喝、そして殺し。魑魅魍魎うずまく裏の世界は、以前なら小市民の目に触れることはなかった。丸暴や外国人マフィアの専売特許だったのだ。限られた人しか入れない、会員制のバーのようなものだった。それが今ではフリーターであろうが主婦であろうが、宅配ピザを注文するように気軽に足を踏み入れることができる。依頼主として、そして実行犯として。

社長はネット上で密告者を殺す暗殺者を探した。

たった二時間。驚くほどすぐに見つかった。“キール”。安易な名前だ。彼らは密告者をどのように殺すか、そして報酬などの契約内容を、ネット上で入念に打ち合わせた。

社長に呼び寄せられた密告者は、“キール”がコーヒーの中に入れたヒ素で、瞬く間に昇天した。豆腐を握りつぶすよりも簡単に事は済んだ。

とはいえ、人を殺すという重大事がそう易々とうまくいくわけがない。殺した時と同じくらい簡単に、依頼主である社長と実行犯である“キール”は逮捕された。ネット上でのやり取りからアシがついたのだ。彼らはあろうことか隠語（スラング）を使わずに、“殺す”や“ヒ素”といったようなストレートな表現でやり取りをしていた。バカな

話だ。今はネット上で何を書いても筒抜けだということを分っていない。

むろんこんな間抜けな殺し屋ばかりではない。綿密に計画を立てて、まるで芸術のような殺しを行うやつもいる。ただ、どうせ金のために殺すのならば、依頼を受けてから殺しを行い、スズメの涙ほどの報酬を得るよりも、適当な人間に保険金をかけて殺した方が、はるかに効率が良いし、安全なのだ。

本物のプロは小市民の目には触れない。本物はたいてい国家や行政、巨大組織に雇われた準公務員的存在である。カスみたいな仕事に食らいついてくるのは、アマチュアか、プロの中でも本物になれなくて、チンケな仕事を不器用に遂行し、はした金を受け取るハイエナどもなのだ。そんなやつらに仕事を依頼する人間の気がしれない。

ここまでえらそうに殺し屋について語ってきたが、おれは殺し屋ではないし、いままでに殺し屋であった時期もない。もちろん殺しを依頼したこともない。すべてイサオの受け売りである。一応断っておくが、イサオという名前はあいつの本名ではない。仮名である。といってもあいつに配慮しているわけでは全くない。人を脅迫して、他人の棲家をぶんどるやつのことなんか、誰が気にするもんか。あいつの名を明かさないのはおれの身に危険が及ぶのを避けるためだ。あいつに関することを公にするのは大きな危険が伴う。

それでもおれがこんなものを書いているのは胸くそが悪いからだ。一日中おれの部屋でパソコンをいじくってるニート野郎のくせに、おれの何十倍もの金を持ってる。嫉妬？その通りさ。何が悪い？

今あいつはおれの目の前にある薄いクリーム色のドアの向こうに

いる。どうせまたユーロの動きでも見てるんだろう。悔しいことにあいつは腕利きのデイトレーダーでもあるんだ。一日に百万ぐらい楽々稼ぐ。マジでむかつくやつだ。

だが怒りとともに恐怖もある。こんなものを書いているところを、あいつに見つかったら、やつの愛銃アラスカンが火を噴くだろうから。確かにおれの家の壁は、隣のチャラ男が夜な夜な女を連れ込んでヤッてる声がはっきり聞こえるくらい薄い。でも、あいつなら減音装置（イレンサー）さえつければ、誰にも気づかれずに、おれが悲鳴をあげる間もなく殺すことが可能だろう。考えただけで身震いがする。でも書かないとあいつへの怒りは収まりそうもない。ジレンマだ。

まあ、いい。とりあえず書く。その結果死んだって知るもんか。

第二章　天使が悪魔（前書き）

推理タグではないような気もしますが、適当なものがなかったので

…

第二章　天使が悪魔

小さいころのイサオは天使だった。

華奢で、手足が長く、日本人離れした北欧系の顔立ちをしていた。特筆すべきは目だった。小学校の頃のあいつの目は、秋晴れの日の朝のような澄み切った目をしていた。おれはそんなあいつの目が、そして何よりもあいつ自身が好きだった。

おれは当時六年生で、あいつは一年生だった。おれが一年生の教室に遊びに行くと、いの一番に飛び出してきて、「遊ぼう」というまなざしをおれに送ってきた。イサオとおれは絵を描いたり、鬼ごっこをしたりして遊んだ。体力的には遥かにおれの方が上だったはずだが、どうしてもあいつには勝てなかった。いつもあいつはおれが追ってくるコースを予測し、裏をかいて振り切った。鮮やかな手並みだった。そして、おれから逃げ切ったのを確信すると満足げな笑みを浮かべるのだった。

一年後、おれは中学にあがり、イサオと離れ離れになった。

中二の時、学校祭がありイサオも遊びに来ていた。「おれのこと覚えてる？」と尋ねると満面の笑顔で頷いた。中学の時にイサオに会ったのはその時だけだった。

俺が高校にあがると、まったくイサオに会う機会は無くなった。

大学に通うようになったころには、イサオとの思い出も、イサオという人間そのものもすっかり忘れてしまっていた。

ところがおれが大学四年の夏、イサオが行方不明になった。

イサオがアメリカに短期留学しているときに事件に巻き込まれたのだ。高校生が異国で襲われる、このセンセーショナルな事件は、ネタに飢えていたマスコミの格好の餌食となった。イサオの家族は毎日のように取材を受け、テレビの全国放送でも取りあげられた。泣いているイサオの母親の顔が何度もテレビ画面に映し出された。

おれが噂やニュースで聞いた話を総合すると、こういうことになる。

イサオは事件の当日、友達と海に遊びに行っていた。浜辺で水をかけあったり、沖まで泳いだり、女の子をナンパしたりしているうちに夕方になった。一緒に来ていた二人の友達はトイレに行く、と言ってイサオを一人残し、連れだってトイレに行った。そして友達がイサオのもとに戻ってみると、あいつの影も形もなくなっていたのだ。遺留品は財布一つだけ。中身は全部抜き取られていた。目撃証言は、イサオが三人の男にからまれていたという地元住民の証言のみ。事件現場の砂浜には小型ボートが出発した跡が残されていたが、戻ってきた跡はなかった。警察はその他にも手がかりはないか、付近をくまなく捜査したが、結局有力な情報は見つからなかった。

あまりにも謎が多いこの事件は、世間の（主におせっかいな週刊誌の）興味をかきたてた。金目的の犯行であるとか、海に沈められたのだとか、事件現場がゲイカップルの出会いの場となっていたことから、レイプされて連れ去られたのだとか、いろいろな憶測を生んだ。

捜査は二年半にも及んだが、結局迷宮入りとなった。捜査本部の看板も下ろされた。

それでもイサオの母親はあきらめることができず、現地まで足を運び、イサオの友達や付近の人々に話を聞いたり、事件現場に実際に足を運んだりして、どうにかイサオの足跡をたどろうとしたが、すべて徒労に終わった。

アメリカから戻った母親は悲嘆にくれた。昼夜問わず泣き続けた。友達や近所の人々との交流が少なくなった。そして一か月もすると家から一歩も出なくなり、家族とも挨拶を交わす程度になっていった。

母親はカウンセラーに相談したり、精神科医に薬を処方してもらったりしていたが、目立った改善は見られなかった。

そこで家族は母親にイサオについて区切りをつけさせようとした。イサオの葬儀を行ったのである。

おれもちょうど会社から長期休暇をもらい、実家に帰省している最中だったので、その葬儀に参列したが、実に奇妙な葬式だった。

葬式に来た人々はお悔やみをいうのをためらい、微妙な面持ちで仏前に座っていた。講和を行う坊さんも、必死で適当な言葉を探していたが、結局見つからず、グダグダなままで話が終わった。おれもこれで涙もろいところがあるのだが、ほんの一滴の涙も流れなかった。母親だけが大声をあげて泣いていた。死体が入っていない棺桶の上で、イサオの遺影だけが笑っていた。

葬儀の途中、イサオのばあさんと話をする機会があった。

「イサオくん、残念ですね。でも、ぼくは生きていると信じていま

す」

生きている、という言葉は、イサオの生存をあきらめた家族には禁句だったかもしれない。でもおれは正直な自分の気持ちをいった。

「どっちでもよかぁ」

おれは耳を疑った。

「姉ちゃんたちが上に二人おるけんな。イサオがおらんでん全然寂しゅうない。生きとるもんだけで、どうにかやるたい」

葬式をやろうと言い出したのはこいつだな、と思った。どっちでもいいと言ったのは、おれに心配させまいという配慮かもしれない。年齢を経て得た達観があるのかもしれない。でも、イサオの母親の気持を考えたら、そんなこと言えないはずだ。お腹を痛めて生んだ子をそうやすやすと諦められないことくらい、同じ女なら分かるだろう。

おれはばあさんに丁重におじぎすると葬儀場を後にした。おれの右拳が震えていた。

それから、さらに三年がたった。

おれは仕事帰りに酒でもひっかけて帰ろうと、新宿駅のあたりで飲み屋を探していた。

雑踏の中を歩いていくと、大きく手を振る人影が見えた。外国人かなと思った。風俗の客引きか何かか？どんどん近づいてくる。長い手足、澄み切った目。

「まさか、イサオか？」

その言葉を聞くやいなやあいつはおれに抱きついてきた。おれは男同士が抱き合うのもなと思ったが、あいつがアメリカに留学していたのを思い出し、なるほどアメリカナイズされて帰ってきたんだな、と心の中でほくそ笑みながら、受け入れる態勢を作った。あいつの左腕がおれの腰に回った。

「お前、生きていたのか？」

おれはそう尋ねた。

腹に固く冷たいものが触った。

「動くな、撃つぞ」

あいつはおれの耳元で静かに囁いた。

横断歩道の信号は変わり、人々は動き始めた。夜の街を彩るネオンは点滅を繰り返す。聞こえてくる、ＯＬの笑い声。おれの時間だけが止まっていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1680ba/

殺し屋は人を殺さない

2012年1月6日09時45分発行